

(報告要約) 江戸期における儒礼受容

——幕末期の儒礼言説を中心に

韓 淑 婷

近年、日本における儒礼受容に関する研究が進展しつつあり、それは主に朱熹『家礼』の実践に焦点を絞って考察しており、儒礼受容の不在が日本儒学の特徴であるという従来の理解に対する再検討とも言える。本報告では、日本における儒礼受容研究の中でも、未だ研究の多くない幕末期に見られる儒礼言説について注目し、儒式喪祭礼に関する具体的な主張を検討した上、儒礼が政治的文脈の中で語られるという事例を通して、幕末期における儒礼言説の意味について試論してみたい。本報告で主に使用する史料は、幕末の思想家佐久間象山の『喪礼私説』、儒者佐藤一斎の『哀敬編』、水戸学者藤田幽谷の『二連異称』、陽明学者山田方谷の『義喪私議』である。

幕末期における儒礼受容の特徴は、主に次の三点に要約することができる。①日本の伝統的喪葬風習への尊重、②仏式喪葬作法への容認、③服喪期間への改変。

象山『喪礼私説』と一斎『哀敬編』における座棺の推奨や、象山『喪礼私説』・一斎『哀敬編』・方谷『義喪私議』における日本人普段の衣服衣装に合わせた喪服様式の提案などから分かるように、

彼らは儒式喪礼そのものを忠実に再現するよりは、いかに日本で実践されやすいように工夫するかの方を重視している。この点を最も表せるのは、象山『喪礼私説』と一斎『哀敬編』に見られる喪礼の道具に「刀」を取り入れようとする主張である。武士階級のシンボルである「刀」を喪礼作法上において対応することから、彼らの日本特有の身分・階級への配慮が考えられよう。そして、細かい作法に対する見解が異なるものの、この日本事情を十分に配慮するという姿勢は、時期（江戸時代初期・中期・後期・幕末期）と喪の種類（親喪・国喪）とを問わず、日本における儒礼受容の共通的特徴と言える。

江戸時代では寺檀制度の存在により一般的に喪葬式が仏式で行われていた。一斎はもし『家礼』の「不作仏事」を根拠にしてお寺に無礼であれば、祖先も安らかにならないと考えており、象山も寺檀制の關係で父母が生前仏教に帰依しなければならないならば、死後も父母の「帰依の心」に従い、仏式作法を保留すべきだとしている。幽谷は「母子平生崇信」するところに従うことこそ「孝」の至りであるとし、誠意を尽くせば礼の形式に拘る必要がないと述べており、

方谷は日本において慣習として行われる仏教の「七々日」について、世俗が慣用するがゆえに採用すべきだと主張している。要するに、世俗一般の仏式喪礼の作法に対して、寺檀制度という既成事情を尊重することや、喪礼の形式よりも「哀戚の情、思慕の誠」を重視するなど、彼らの仏式喪葬に対する容認が見られるとともに、「父母帰依の心」に従うという「孝」の論理に依拠して、仏式作法を温存したからこそ「孝」を実現できるという思考の回転も見られよう。

中国の五服制度では父母のために「三年の喪」（実際は二十五ヶ月か二十七ヶ月）という規定があるのに対し、幕府服忌令では一年（十三か月の服と、五十日の忌）と規定されている。服喪期間に対して、一斎も象山も「三年の喪」が有名無実となる恐れがあるため、幕府服忌令に規定される「一年の喪」をしっかりと守るに及ばないと主張しており、幽谷は一年の喪で孝を尽くしきれないと思われる場合は、三年の心喪（哀悼の心を以て自粛生活）を実施することを提唱する。方谷も「五十日」の服喪を主張し、服喪期間の長短よりも哀痛の心の有無に問題を看取しているのである。

幕末期において、儒礼が政治的文脈の中で語られる場合が多かった。幕末期における儒式喪礼の政治的意義は次の四点に要約することができる。①「薄俗」を改め、「人心」を安定させる、②庶民教化の一環として役割を果たす、③富国策につながる、④「君臣の義」に立脚した一種の国家護衛策。

①②について、会沢正志齋が書いた『二連異称』の序文の中で、幽谷の作成意図が世の中の「薄俗」を改め、「名分」を正し、忠孝を明らかにすることであると述べており、象山は儒式喪礼の服喪規定が「治道」をさかんにし、「薄俗」を厚くするためのものである

としている。また、幽谷は、葬祭の礼は仁愛を教えるものであるため、葬祭の礼が明らかであれば、民は孝であると指摘しており、象山は、民を教えるには孔孟の正道を以てすべきであるとし、その中でもとりわけ孝を第一とし、孝の道を第一とするためには、喪服の制度を正すことがその根本であると述べている。

③について、象山は幕府への上書において、日本の国力が西洋諸国に匹敵できない理由の第一として、仏教徒の中から「遊民」が多く出て国の財政を無駄に消耗することにあるとし、その対策として、喪葬行事を寺檀制度に頼らずに儒式喪礼を導入することを提案し、新たな儒礼制度を持続的に貫徹することを通して、徐々に「遊民」の問題が解決されると期待している。④について、方谷は君主のための服喪は風俗を厚くし、倫理を正すという効果があると考えると同時に、喪礼と国家護衛との間に一つの接点を見出し、君主への服喪を通して「君臣の義」を明らかにし、武士の気風を振起させることができるという主張し、それによって国家護衛を堅固にすることが可能となるという思考の論理を呈している。

以上から、幕末期における儒礼受容は、当時の政治状況と深くかわるものであること、そして幕末当時の知識人が幕末期の国際的・政治的危機を乗り越えるための、一つの対応策を示すためのものでもあったことが伺えよう。

(一)吾妻重二『家礼文献集成 日本篇(1-11)』(関西大学出版部、二〇

一〇)二〇二三)、同『愛敬与儀章—東亜視域中的「朱子家礼」』(上海古籍出版社、二〇二二)など多数、田世民『近世日本における儒礼受容の研究』(ペリカン社、二〇二二)、松川雅信『儒教儀礼と近世日本

社会―關齋学派の「家礼」実践』（勉誠出版、二〇二〇）。